

プロテスタント系保育所・幼稚園等における 保育・教育理念の特色

神奈川県を事例として

鈴木 康 弘¹⁾ 吉 田 直 哉²⁾ 安 部 高太朗³⁾

¹⁾ 敬心学園職業教育研究開発センター 客員研究員

²⁾ 大阪府立大学

³⁾ 日本児童教育専門学校

How Do Protestant Ideals of Early Childhood Education and Care (ECEC) Feature in Nursery Schools and Kindergartens in the Kanagawa Prefecture Area?

Suzuki Yasuhiro¹⁾ Yoshida Naoya²⁾ Abe Kotaro³⁾

¹⁾ VET/RDI Center

²⁾ Osaka Prefecture University

³⁾ Japan Juvenile Education College

Abstract : The purpose of this paper is to clarify the effect of Protestant ideals of early childhood education and care (ECEC) in nursery schools and kindergartens in the Kanagawa Prefecture area. We analyzed these features by focusing on Protestant words, phrases, and events or activities in ECEC, with a total of 48 cases.

Based on a KH coder analysis, it is clear that the cultivation of an aesthetic sensitivity is key in Protestantism. Through this cultivation of an aesthetic sensitivity, children learn to respect all creatures and to love others as they love themselves (as the Bible says). In this aesthetic sensitivity, “creatures” refers to human beings as *imago Dei* (in the image of God). “Love” is regarded as showing respect for one’s life and others’ lives, as both are of equal value.

Key Words : Protestant, Ideals of ECEC, Cultivation of an aesthetic sensitivity

抄録 : 本稿の目的は、キリスト教保育連盟の神奈川県部に加盟している園の保育・教育理念の特色を明らかにするものである。ウェブ上で保育・教育理念を公開しており、かつ、プロテスタント系の理念や行事に関する記載を含んでいる48園分をテキストファイル化し、KH コーダーを用いて、その特徴を析出した。

プロテスタント系園の保育・教育理念としては情操教育が重視されている。そこでの情操教育は、子どもが「生命」を尊重する心的態度を獲得し、「隣人愛」と言われるような、他人を愛し、愛される態度をもつ存在になることを目指している。プロテスタント系園でいう「生命」とは、神の似姿として創造された人間の命を意味している。そして、「生命」を与えられた子どもが、他の「生命」に出会い、その「生命」を尊重し、逆に尊重されるという実践的倫理が「愛」と言われるのである。

キーワード : プロテスタント、保育理念・教育理念、情操教育、愛、生命

1. 本研究の目的と課題

本研究の目的は、神奈川県内に所在するプロテスタント系保育所・幼稚園等における保育・教育理念の特色を、各園がWebサイトにおいて、どのように保護者や市民に向けて発信・提示しているのかを、KHコーダー（テキストマイニングソフト）による計量テキスト分析の手法から明らかにすることである。

園における保育・教育理念とは、創立者や設立者の考えや願い、理想とする保育の思想や言葉、育てほしい子どもの姿などが掲げられることが多く、保育内容やカリキュラムを構成するうえで園長や教職員の間で共有されるものである。それらの共有された理念は、組織のシンボルとして、園特有の雰囲気や文化を構成する要素の一つとなる。

本研究は、キリスト教、特にプロテスタント系の保育所・幼稚園等の保育・教育理念を対象とする。保育所・幼稚園等が、政府及び自治体等からの財政的支援を受ける公的組織である一方、法人立、特に宗教的背景を持つ園は、公的組織としての側面と、宗教という私的組織としての側面をいわば併有している。公立園や、非宗教的な社会福祉法人、企業立の園とは、設立の理念が相違する以上、保育・教育理念にも相違がみられるのであろうか。本研究では、プロテスタント系の保育所・幼稚園等の保育・教育理念の中に、宗教的要素と非宗教的要素がどのように導入され、語られているかを、使用されている語彙とその用法に着目しつつ明らかにする。

戦後、キリスト教系の園の数は、1949年の私立学校法施行を受け、学校法人に対する私学助成の振興という占領軍の方針にも後押しされてさらなる普及を遂げた。1952年の段階では、2,874園であったが、戦後のベビーブームに伴う需要の増加を背景として、1960年には、10,796園までに増加していった。ただし、1970年代以降、キリスト教を含めた宗教系の保育所・幼稚園は、人口減少や少子化に伴い、厳しい経営環境に直面する園も増えつつある¹⁾。現在のキリスト教系の保育所・幼稚園は、出生数の減少に伴う就学前児童数の減少という事態に向き合いながら、在園児を確保するための努力を続けている。園児募集活動の一環として、園の特色として理念や宗教性を打ち出しながら、広報に取り組み、保護者

や地域の人たちのニーズを踏まえながら、新たなパートナーシップを結ぶことが求められるようになってきている。現在の宗教系の保育所・幼稚園は、保護者のニーズや保育需要の増大に応えながら、どのように保育理念における〈自律性〉と〈独自性〉を担保していくのか、その〈自律性〉と〈独自性〉と宗教性との関連づけをどのようにするかなどが問われているといえる²⁾。

2. 先行研究および分析対象・方法

(1) キリスト教保育連盟と『キリスト教保育指針』

本研究では、キリスト教保育連盟の神奈川県部に加盟している保育所・幼稚園等を対象として選んだ。

神奈川県は、東京や横浜、川崎など首都圏のベッドタウンとして、人口900万人を抱える首都圏を代表する県の一つである。神奈川県は、都市部や住宅街といった人口密集地から、人口減少・流出が進む郊外の農村部に至るまで、さまざまなバックグラウンドをもつ地域を有している。以上のことから、神奈川県のキリスト教園がWebサイト上で公開・発信している教育理念や方針には、それぞれの地域の保護者や地域の人たちにどのように伝えるべきか、という工夫がなされているといえよう。

キリスト教保育連盟とは、日本のプロテスタント諸教派に属する保育所、幼稚園、養成校が加盟している団体である。その活動内容としては、機関誌『月刊キリスト教保育』や『ともに育つ』、『キリスト教保育指針』、『キリスト教保育ハンドブック』の出版、園長研修会や夏季研修会、保育セミナーなどの研修事業などがある。

キリスト教的な教育・保育理念を考える上で参考になるのが、上述した『キリスト教保育指針』である。この指針が示しているのは、「キリスト教信仰」や「礼拝」、「園生活での祈りや感謝」に関する事項のほか、「イエスさまと共に」という意味で、「共に」という言葉を用いることで、キリスト教的な保育の固有性・独自性を提示しようとするものとなっている。その一方で、キリスト教に関する難解な専門用語が用いられておらず、できるだけわかりやすい言葉で言い換えがなされていることや、幼稚園教育要領や保育所保育指針と共通性を意識して作成された

ことが見受けられる。

これらの指針は、キリスト教保育連盟に所属する園にとっては、キリスト教保育のあり方を示すガイドラインとなっている。ただし、本研究が対象とするキリスト教園が Web サイト上で公開・発信している教育理念や方針は、これらの指針を参考にしながら、それぞれの園の設立の理念や、保護者や地域の人の現状を踏まえて、それぞれアレンジしていると考えられる。そのなかで、園としての特徴やキリスト教保育の理念が、どのような表現で示されているのか、というのが、本研究の問いである。

以上のことから、キリスト教保育連盟による『キリスト教保育指針』の作成は、キリスト教保育連盟が主体となりながら、〈共通性〉と〈整合性〉を模索すると同時に、宗教的な〈独自性〉と〈自律性〉をどのように両立させようとしているのかを示した、キリスト教的な教育・保育理念のあり方を読み解くことのできる重要な資料といえよう。

ただし、『キリスト教保育指針』の内容は、保護者や地域の人びとに直接公開されているものではない。本研究が着目する各園が Web サイトで公開した保育・教育理念は、キリスト教保育指針が示したキリスト教的な理念を受け、園の創立の理念、地域の実情、利用者のニーズ等を踏まえながら、わかりやすく訴求性の強い言葉へとパラフレーズされたものが公開されていると考えることができるだろう。

(2) キリスト教保育に関する先行研究の検討

キリスト教保育に関する研究動向としては、キリスト教系の園の園長および保育者が認識している現状と課題を質問紙調査として分析したものに、浅見均 (2004) の研究がある。この研究は、保育者のなかのキリスト教信者は、約半数程度に留まっており、信者と非信者の保育者のあいだで、礼拝やお祈りのあり方を中心にキリスト教保育の捉え方に差があることを明らかにしたものである。浅見の研究は、キリスト教保育の養成校に関わる者の立場から、キリスト教保育の現状把握を通じて、キリスト教保育の独自性をどのように担保していくか、を模索しているものである。ただし、浅見の研究は、保育者49名のそれぞれの意識を調査したものであり、園としての公式見解を扱ったものではない。

次の渡辺のゆり (2006) の研究も、浅見の研究と同様に、キリスト教園が、宗教的ベクトルと、非宗教的ベクトルの間でいかに妥協を図るかという課題に直面していることを示している。渡辺は、キリスト教系の園の保育者から自由記述の分析から、キリスト教保育の特色がどのように認識されているかを明らかにしようとした。自由記述のなかで用いられたキリスト教に特徴的な語彙としては、「愛する」「信頼する」「尊重する」「安心感」「優しさ」「おだやかさ」などの心情的な側面に関する認識が中心を占めており、子どもの知的な理解に関する側面が、後景化していることを明らかにしている。

多くのキリスト教系の園が依拠するキリスト教保育指針を対象としてその変遷の内容分析に取り組んだものとしては、岸本朝予 (2012) の研究を挙げることができる。岸本は、1989年に刊行された『キリスト教保育指針』を境目として、子どもを信仰者へと導く保育から、キリスト教に基づく保育への転換という大きな変化があったことを指摘している。ただし、それらの変化がもたらした課題として、キリスト教保育に関する定義や目標が、不明瞭なものとなり、「結局漠然とした共通理解の中で保育が行われることになっている」(岸本 2012: 34) ことも、同時に指摘している。岸本も、キリスト教保育に関する「定義や目標」という理念が揺らぎ、「共通理解」の求心性が弱まっていることを指摘している。

上述の研究では、園長や保育者、またはキリスト教保育連盟の指針を分析対象としたものであり、実際の園がどのような理念を発信・提示しているかという部分については、検討されていない。本研究は、これら先行研究が着目してこなかった園の理念に焦点化することで、キリスト教保育の特徴が、保護者や地域の人たちを対象として、どのような概念やキーワードを用いて発信されているのかを明らかにしようとするものである。

(3) テキストマイニングについて

今回、分析に際しては、テキストマイニングソフト (KH コーダー) を用い、Web サイト上の保育・教育理念に関する記述を対象テキストとして、これに対する計量テキスト分析を実施した。キリスト教に関連するキーワードやフレーズが、どのような言

葉と共に出現しているのか、パターンや頻度ともに明らかにすることを試みた。

3. 分析結果

神奈川部会は、加盟園54園のうち、52園が、独自に Web サイト (<http://www.kihoren-kanagawa.com/>) を保有しており、保育理念・教育方針等を公開している。そして、キリスト教的な理念や行事を明示していたのは、Web サイトを公開している52園のうち、48園であった。

本研究では、これらの Web サイトで公開されている保育理念・教育方針に関連するテキスト（「教育目標」や「大切にしていること」、「園の特色」等も含む）をテキストデータ化した。なお、各園の理念や方針に関するテキストは、それぞれの園を、ひとつの段落とみなし、分析単位を「段落」とする形で、テキストマイニングソフト（KH コーダー）による分析を試みている。

（1）テキスト全体の頻出語彙にみる保育・教育理念等のキリスト教性

次の表「保育理念・教育方針等に関するテキスト全体の頻出語」は、保育理念・教育方針等に関するテキスト全体の頻出語（主に名詞（人名・組織名を含む）、動詞、形容詞、形容動詞、副詞など）の上位40語を示したものである。

保育理念・教育方針に関する頻出語を概観してみると、一般の保育所・幼稚園等が掲げる理念と共通するフレーズ「遊び（103）、生活（94）、遊ぶ（40）、

学ぶ（28）、発達（21）、個性（22）」が、高い頻度で用いられていることがわかる。

このことと関連して、保育理念・教育方針等に関するテキスト全体で用いられた単語がどのような頻度と関連のもとで用いられているのか（＝共起度）を視覚的に示したのが、次頁の図1「テキスト全体で用いられていた単語の共起ネットワーク図」である。この図からは、保育理念・教育方針等に関するテキストにおける頻出語は、「キリスト教」と「愛」、「聖様」と「神様」を除けば、一般的な保育で用いられている語彙で占められているということ、読み取ることができる。

さらに、「一人ひとりを大切にする保育 子どもの資質や発達の状況は一人ひとり違います。そのために、一人ひとりの発達段階を丁寧に見つめ、ふさわしい援助を心がけています。」（福音幼稚園）や「遊びを中心とした園生活の中で、幼児が自発的・創造的に発達するように導きます」（東洋英和女学院大学附属 かえで幼稚園）、「この時期の子どもの成長に大切な「あそび」を通して、楽しくのびのびと生活し、さまざまな生活経験をつんで、豊かな情操、創造性を養うよう保育しています。」（野毛山幼稚園）など、「遊び／あそび」を、子どもの発達・成長を支えるものとして位置づけるという、多くの一般園と共通する視点も示されていた。

もちろん、キリスト教園が園の教育理念・方針として発信・公開している内容は、一般園と共通する文章やフレーズもありながら、それと同時に、キリスト教に関する文章や語彙と並んで用いられる場合

表 保育理念・教育方針等に関するテキスト全体の頻出語（40語）

順位	頻出語	語数	順位	頻出語	語数	順位	頻出語	語数	順位	頻出語	語数
1	子ども／子供／こども	248	11	豊か	63	21	育つ	40	31	活動	30
2	大切	140	12	人	63	22	持つ	40	32	願う	30
3	保育	112	13	一人ひとり／ひとりひとり	56	23	環境	40	33	社会	29
4	遊び	103	14	教育	52	24	幼児	40	34	人間	28
5	心／こころ	99	15	成長	50	25	愛	37	35	学ぶ	28
6	生活	94	16	キリスト教	48	26	園	37	36	神	27
7	自分	91	17	遊ぶ／あそぶ	47	27	自然	36	37	創造	26
8	幼稚園	78	18	力	46	28	感謝	34	38	育む	25
9	育てる	72	19	考える	44	29	生きる	34	39	友だち	24
10	神様／神さま	63	20	愛す	41	30	知る	34	40	楽しい	23

していきたい。

①宗教行事や礼拝、信仰や聖書に関するフレーズ

礼拝や宗教行事に関する言及は、キリスト教的な教育・保育の理念に固有のものである。礼拝の文例としては以下のようなものが挙げられる。「礼拝を守り、聖書の言葉に触れ、祈る生活を大切にします。」(認定こども園 捜真幼稚園)や「私たちの幼稚園では水曜日に礼拝を守ります。」(百合丘めぐみ幼稚園)という文言が示しているように、礼拝は、「大切に守る」ものであり、「守る」ものである。言い換えれば、礼拝とは、保育者と子どもがともに、信仰を表明する行為として重要な意味付けが与えられているのである。

子どもたちが、礼拝やお祈りを通じて学ぶのが、「心のあり方」と「気持ちを表現すること」である。「日常の礼拝や花の日、クリスマスなどのキリスト教行事により豊かな心や思いやりを育てる。」(認定こども園 宮の台幼稚園)や「日々の礼拝や神さまに祈ることを通して、子どもたちの心に生命の大切さと見えないものに目を注ぐよろこびを伝えます。」(鶺鴒沼めぐみルーテル幼稚園)、「ひとり一人の子どもの発達と、生活経験を理解した指導のもとで、心身の健全な発達をはかり、神を礼拝することにより宗教的心情と道徳性の芽ばえをつちかい、自主自立の精神を養うことを目的とします。」(二本榎幼稚園)と示されているように、礼拝やお祈りは、「豊かな心」や「思いやり」、そして「目に見えない大切なもの」などを学ぶ教育方法と位置づけられる。ただし、礼拝やお祈りを通じて学んだ「心のあり方」は、「気持ちを表現すること」を通じて行動すること、可視化されることが求められる。

「礼拝では、皆が同じように神様に愛されている喜びと守られている安心感、そして助けていただいている感謝の気持ちを表現します。」

(百合丘めぐみ幼稚園)

「また、神様へのお祈りも自分を表現することの一つです。お祈りを大切にできる子は、見えない神様への「ありがとう」の気持ちを、言葉や行動(活動)で表現できるようになります。」

(横浜本牧教会付属 早苗幼稚園)

礼拝やお祈りは、「豊かな心」や「思いやり」の涵養、そして「目に見えない大切なもの」などの実在を実感することを目指すための教育方法であると同時に、それらの心や感謝を表明する行為でもありうる。すなわち、このような目的と手段の一致している宗教的な営みは、「行為や型を通じた心の教育」であり、「心の教育の奔出としての行為や型の実践化」でもあると解釈することができるだろう。

そして、子どもたちが、「豊かな心」や「感謝する心」を学ぶうえで、キリスト教の聖典である「聖書」の存在にも言及されている。「人への優しい思いやり、感謝する心、希望をもつこと、そして人を信じ愛すること。毎日の保育の中でお祈りや聖書の話を通して、共感し心を動かすことで、人格の基礎を培います。」(福音幼稚園)や「神様から愛されている大切なひとりひとりであることを聖書の言葉、牧師先生・教師を通して、メッセージを伝えています。」(希望が丘教会附属 めぐみ幼稚園)、「礼拝を守り、聖書の言葉に触れ、祈る生活を大切にします。」(認定こども園 捜真幼稚園)の事例のように、聖書の言葉やお話は、子どもたちに伝えられることで、心や人格の形成に寄与するものとされているのである。

ただし、聖書と子どもたちの関係をめぐっては、「聖書のお話を聞いたり、聖句を覚えたり、楽しく賛美したり、お休みしたお友だちの為に祈りをしたり、保育者も共に日々神様に喜ばれる生活をしたいと願っています。」(百合丘めぐみ幼稚園)のように、「聖書のお話を聞く」や「聖書の言葉に触れる」というレベルだけではなく、「聖句を覚える」という事例も少数ながら確認することができた。

もちろん、「聖書」の言葉やお話は、子どもたちに伝えられるものだけではない。Webサイト上で公開されている園の理念には、「聖書」の言葉に言及・引用しながら、園全体の保育の理念・方針が語られている事例も多い。例えば、「『隣人を自分のように愛しなさい』聖書ルカによる福音書10章27節 キリスト教(プロテスタント)信仰に基づく保育を基本とした幼児教育を行います。聖書のメッセージの中心である「神様を愛することと、自分を愛するように隣人を愛することのできる人間」への成長を祈り願っております。」(神奈川教会付属 神奈川幼稚園)や「個性を大切にする「キリスト教教育」「私の目に

は、あなたは高価で尊い」と聖書に示されているように、すべての子どもたちがかけがえのない唯一無二の存在。」(認定こども園 関東学院のびのびのば園)、「イエス・キリストの教え(聖書)を土台とすることがキリスト教教育です。その教えは「私達の隣人(となりびと)を愛する」ことでもあります。愛とは人間誰もが持つものですが、とかく私達は自分の好きな人しか愛せません。聖書の中にある「自分を愛するように、あなたの隣り人を愛しなさい」の言葉に教えられる時に、私達は自己中心的ではなく、自分以外の人の人間性と人格を尊重する豊かな人間として養われ成長できるのです。」(横浜本牧教会付属 早苗幼稚園)のように、園全体の教育の理念の土台となるものに、聖書の言葉、言い換えれば、イエス・キリストの教えが位置づけられているというのも、プロテスタント系の園の理念にみられる特徴であった。聖書のメッセージは、子どもが唯一無二の存在である(個性的存在である)こと、他者への「愛」の重要性を説くものとして位置づけられている。

最後に、キリスト教の宗教行事である「クリスマス」の用例について言及しておきたい。園の理念・教育方針のなかの「クリスマス」の行事は、「キリスト教主義の幼稚園ならではのクリスマス等の宗教行事を親子で共に祝います。」(本牧めぐみ幼稚園)や「クリスマス礼拝・降誕劇 クリスマスを保護者の方々と一緒にお祝いします。」(希望が丘教会附属 めぐみ幼児園)のように、子どもと保護者を含めた行事として位置づけられていた。ただし、川崎頌和幼稚園のように、園に通う子どもたちと保護者だけでなく、卒業生をつなぐ行事として意味づけがなされている事例も存在している。

「いつでも安心して集える場所でありたい頌和幼稚園には、中高生になっても、成人しても、卒園生がたくさん遊びに来ます。クリスマスに招待状を出したり、卒園生の会を開催したり園に戻ってこれる場をいつも用意しています。それは、この場所が関係するすべての人にとって安心できる場所、帰ってこれる場所でありたいと想うからです。」(川崎頌和幼稚園)

クリスマスという宗教行事には、「いつでも安心して集える場所」や「帰ってこれる場所」を確認できる機会として、ホームカミング・デーのような位置づけが与えられている。このことから明らかなように、クリスマスは、必ずしも宗教行事としての色彩を付与されていない。

②愛に関する文例

キリスト教的なキーワードのなかでも特徴的なものが、「愛」に関する文言である。

まず、「愛」に関連する量的な頻出度について確認しておきたい。「愛」に関する語彙(名詞「愛」、動詞「愛す」・「愛され」など)をひとつのグループとして解析した場合、同時に用いられる言葉は、子ども(0.7143)をはじめとして、育てる(0.641)、人(0.5946)、大切(0.5532)、豊か(0.5526)、心(0.5476)、遊び(0.5476) 保育(0.5435)、育つ(0.5135)、キリスト教(0.5122)などであることが明らかになった。

このような「愛」もしくは「愛す」、「愛する」を用いた文章の利用法を、具体的な文例に即して検討する場合、「愛」がどこからどこへ向かうのかという観点から、いくつかのパターンに分類することができる。

ひとつは、神からの恩寵としての愛という意味で用いられているものであり、イエスや神様から子どもが愛されるというベクトルである。「神さまから愛されている大切な存在であることを心に染み込ませます。」(福音幼稚園)や「何よりも、それぞれ自分が神さまから愛され、人から愛され、かけがえのない大切な一人なのだということを自覚できるように愛して育てます。」(私塾 まきば(認可外保育施設))という文例が示しているように、キリスト教的な保育は、子どもが、イエスや神様から愛されることに、「気づく」ことや「感じる」こと、そして「自覚」できることが、目標として定められている。

「神」は、命を与えてくれる存在であると同時に、私たちが生きる自然や世界の恵みを与えてくれる存在、愛し、与える存在である。目に見えないイエスや神様を、身近な存在として感受するのは、「愛」を媒介としてなされるということである。逆に言えば、イエスや神の存在は、「愛」に気づくことによ

て子どもには認識される。愛し、与える存在である超越項の存在を感受することにより、子どもはその超越項の「愛」という態度を獲得し、「愛」を実践しようとする。つまり、子どもにおける愛の実践は、超越項の振る舞いの模倣、あるいはモデリングである。

もう一つは、隣人愛と呼ばれるものであり、子ども自身が、隣人や友達、神様などを含めた他者を愛するというベクトルである。新約聖書ルカによる福音書10章27節の「隣人を自分のように愛しなさい」というフレーズの引用（神奈川教会付属 神奈川幼稚園）や、「友だちを愛する子どもに育てる」（桜ヶ丘幼稚園）、「命の大切さ、人や物を愛する生き方、感謝の気持ちを表す子ども」（平和学園幼稚園）、「神様を愛する人」（私塾 まきば（認可外保育施設））という文言が示しているように、愛の対象は、人や物、神様を含めた多様な存在である。つまり、子どもが、さまざまな存在に対して愛を持って接するという心情や行為を身につけることが、教育目標として掲げられているということである。

ただし、上述した二つのベクトルは、矛盾するものではなく、むしろ、後者は前者の前提条件になるものとされている。「神様を愛することと、自分を愛するように隣人を愛することのできる人間」への成長を祈り願っております。（神奈川教会付属 神奈川幼稚園）や「幼稚園で十分愛されていると感じた子どもたちは、必ず人を愛する人間に育っていきます」（認定こども園 伊勢原幼稚園）、「神と人ともに愛される子ども 神に愛され、多くの人々から受け入れられるこどもは、神の心、感謝する心が育ちます」（片瀬のぞみ幼稚園）というフレーズが示しているように、愛されることと愛することは、相互に関連し、互いに強化し合う関係にあるものとして位置づけられているといえよう。

そして、「愛」を学んでいくのは、園における遊びや生活とされる。「そして「遊び」を通して、思いやりや人を愛する事も 学んでいくのです。」（白百合幼稚園）や「毎日の生活の中で、神さまの恵みを感じ、感謝する心、隣人を愛する心が育ちます。」（横浜愛隣幼稚園）などが示しているように、遊びや生活も、愛に気付くための教育方法として位置づけられている。また、「こひつじ学園は、一人一人を大切に

にし、神を敬い人を愛する美しい心情、知能、身体の発達を正しく助長し、健全な社会人としての基礎づくりを目的とします。」（認定こども園 こひつじ学園）とあるように、「愛」は、心身や心情の発達における基礎としても位置づけられている事例もあった。あらゆるポジティブな心情・意欲・態度は、愛の派生であると捉えられているのである。

③生命の大切さに関する文例

第三に、キリスト教的なキーワードとして特徴的なものとして、「命／いのち」や「生命」などのキーワードが用いられている文例を中心に、生命の大切さを強調する言説を指摘することができる。

まず、「生命」に関わるキーワードが、どのようなキーワードとして用いられているのかを確認してみたい。先程の「愛」に関するキーワード群と同様に、「生命」に関わる語彙（「命／いのち」および「生命」）を、テキストマイニング・ソフト（KH コーダー）を用いて、一つのグループとしてコーディングするとともに、解析・処理を行った。これらのキーワード群は、交流（Jaccard 係数：0.5）をはじめとして、味わう（0.4）、畑（0.4）、料理（0.4）、発見（0.4）、基本（0.375）、人格（0.3333）、恵まれる（0.3333）、栽培（0.3333）、野菜（0.3333）、感動（0.3333）、果物（0.3333）、収穫（0.3333）、尊重（0.2857）、生かす（0.2857）、動植物（0.2857）などの言葉と同時に用いられる傾向があることが明らかになった。

ただ、「命」は、子どもの命、人間の命という意味だけで使用されているわけではない。第二の「命」は、子どもが自然環境の中で触れ合う「命」である。砂・水・土・泥で遊ぶこと、動物の飼育、草花の栽培などの子どもたちの遊びや生活のなかの行為には、「命」と触れ合うという経験が含まれている。

例えば、「土、草花、小動物等を通して自然に親しみ、生命の大切さを知る」（認定こども園 霞ヶ丘幼稚園）や「自然に親しみ、自然を大切に子ども 動植物をよく育て、園外に出て散策する事により、自然を豊かに感じる心が育ちます。「命の尊さ」を知ります。」（片瀬のぞみ幼稚園）、「自然と触れ合いを持つ 子どもたちには自然の中にある美しい物やいのちの息吹きを発見し、生きる喜びに感動する体験が大切です。植物や昆虫、鳥などの生き物に接し、その世話をすることを通していのちの大切さを知るようになります。神さまから与えられた人間のいのちを大切にすることになります。」（ハリス記念鎌倉幼稚園）という文例には、子どもたちが、自然のなかの「命」と触れ合うことで、それらの「大切さ」や「尊さ」、「いぶき」を知ることにつながるという価値観が示されている。

「神とイエスキリストの愛を知り、イエスキリストの生き方に学んでいきます。命の大切さ、人や物を愛する生き方、感謝の気持ちを表す子ども」（平和学園幼稚園）や「子ども達一人ひとりが神様から命を与えられ愛され守られている尊い存在であることを感じ、一人ひとりの個性を認め合い、喜び合い、信頼し合って育っていきます。」（希望が丘教会附属めぐみ幼児園）などの文章には、キリストの教えと命や生命を大切することが、重なりあっているということが示されているものといえよう。ここでの愛され、愛するというフレーズで強調されているのは、命としての相互依存という存在様式である。

ただ、注意しておくべきことは、自然やそこにおける命が、神の創造物であることは、人間の命、子どもの命が神の創造に由来するものであることほどには強調されていないということである。人間の命に対する尊重は、人間の命が、神によって創造されたものであることへの気づき、自覚から生じてくるものであるとされていた。それに対し、自然界における命、小さな存在としての動植物を尊重する態度

は、あくまで、動植物を尊重することが、人間の命を尊重することに発展して行く限りにおいて重要視されているかのようである。

つまり、子どもたちが環境の中で接する自然としての命、自然のなかの命は、かけがえのない一回性が刻印されたもの、というよりは、自然という茫漠とした巨大な命が微細な形をとって現れたもの、として捉えられているように思われる。草花であっても、小鳥であっても、昆虫であっても、それらはすべて漠然とした巨大なカテゴリーとしての「命」の中に包摂されてしまうのであり、その「命」がどのような形をとっているかについての気づきが重視されているとは言いがたい。いわば、動植物の命、自然のなかの命は、多数的であるがゆえに匿名の存在なのである。

4. まとめと課題

本研究では、日本キリスト教保育連盟の神奈川県部に加盟している園が、Web サイト上で発信している保育・教育に関する理念・方針等を対象として、その特徴を分析してきた。

キリスト教園が、Web サイト上で発信している保育・教育に関する理念・方針等は、量的な分析からは、一般の保育所・幼稚園等が掲げる理念と共通するフレーズが多く用いられていることが明らかになった。しかし、キリスト教的なキーワード・フレーズに着目するならば、神やイエスの存在、宗教行事や礼拝、信仰や聖書に関するフレーズも用いられており、子どもの身体よりも、心・精神に関する言及が多くなされている。また、「愛」という言葉は、神からの恩寵としての愛と隣人愛という二つの意味で用いられており、それらは、園における遊びや生活のなかで気付くものとされていることが明らかになった。そして、「命」というフレーズには、神が子どもたちに与えた命というキリスト教的な意味で用いられているものと、自然環境の中で触れ合う命という二つの用いられ方が存在している。特に、神の創造物としてではなく、自然という大きなカテゴリーの一部としての「命」としての用法は、キリスト教の教えと保育的な価値観が会う中で独自に生み出された生命尊重を重んじる用法のように思われる。

今後の課題としては、以下の二点を指摘することができる。本研究は、日本キリスト教保育連盟の神奈川県部会を対象としたものであり、他の都道府県の部会や全国規模などより母数を増やす分析を行うことが第一に挙げられよう。第二の課題として、本研究は、日本キリスト教保育連盟というプロテスタント系の園を中心とした団体に着目した分析であり、カトリック系諸園との差異や、プロテスタント内部の宗派的な相違が、保育の方針にどのように影響を与えるのかについては検討することができなかったことが挙げられる。以上の二点については、仏教や神道などの他の宗教との比較・検討を含めて、今後の課題とし、別稿を期すこととしたい。

注

- 1) もちろん、2010年代の大都市圏では、共働き家庭の増加や家庭環境の多様化などにより、保育需要が増大しており、待機児童や「保活」難民が社会問題化している。しかし、人口減少に悩む地方や僻地などでは、引き続き、少子化のために定員割れや閉園、統廃合の危機に直面している（日本キリスト教保育連盟百年史編纂委員会 1986：425-432）。
- 2) 橘木（2013）は、1990年代以降、宗教教育の再強化とも言うべき動向もみられることを論じている。これは、当時の文部省が、少年犯罪の増加や道徳意識の低下を受けて、

「こころの教育」を打ち出したことの影響が大きく、宗教系の保育園は、これらの社会的動向と、建学の理念にある宗教的アイデンティティを再確認しながら、宗教的な特徴のある理念や行事を重視する変化をもたらしたと考えられる。

参考文献

- 浅見均（2004）「幼児と宗教教育」『青山学院女子短期大学総合文化研究所年報』第12号。
- 岸本朝予（2012）「『キリスト教保育指針』の変遷から見るキリスト教保育とは」『聖和論集』第40号。
- キリスト教保育連盟百年史編纂委員会編（1986）『日本キリスト教保育百年史』キリスト教保育連盟。
- キリスト教保育連盟（2003）『キリスト教保育ハンドブック』キリスト教保育連盟。
- （2010）『新キリスト教保育指針』キリスト教保育連盟。
- （2014）『キリスト教保育125年：『日本キリスト教保育百年史』からの動向』キリスト教保育連盟。
- 橘木俊詔（2013）『宗教と学校』河出書房新社。
- ハロウェイ、スーザン（2004）『ヨウチエン：日本の幼児教育、その多様性と変化』高橋登、南雅彦、砂上史子訳、北大路書房。
- 渡辺のゆり（2006）「キリスト教保育園の特色について」『プール学院大学研究紀要』第46号。

受付日：2018年9月10日

受理日：2018年10月14日

